

1 親子の居場所事業

目指す拠点の姿	(参考)3期目振り返りの課題	自己評価 (A~D)	
		法人	区
①利用者を温かく迎え入れる雰囲気のある場になっている。	・ひろばで把握したニーズを拠点だけでなく、地域の支援に広めていくように取り組んでいく。 ・子どもの年齢・月齢に応じた遊びの環境が整備されるように、居場所づくりについて工夫し検討していく必要がある。	A	A
②多様な世代、性別等の養育者と子どもが訪れる場になっている。		A	A
③養育者と子どものニーズ把握の場になっている。		A	B
④親(養育者)自身が親として育ち、また子どもが育つ場となっている。		B	B

評価の理由(法人)

(主なデータ)R4年度
〈年間利用者数と内訳〉

	ポポラ		サテライト
	H30年度	R4年度	R4年度
ひろば利用者	28,136人	23,939人	31,852人
新規登録者	1,694人	1,221人	2,045人
父親の利用	776人	1,064人	2,135人
妊娠期の利用(プレママ)	236人	207人	182人
(プレパパ)		184人	152人
多胎児利用	—	145組	317組
外国籍利用	—	480組	147組

※R4年度はコロナ禍対応でひろば・イベント利用人数を制限して運営。

【令和4年度都筑区子育て拠点ポポラアンケート(※1)】
〈ポポラ・サテライトについてどう思いますか〉

	そう思う	どちらともいえない	そう思わない	合計
利用者を温かく迎え入れる雰囲気がある	262人(94%)	16人(6%)	1人(0%)	279人
誰にでも気兼ねなく来られる場になっている	239人(86%)	34人(12%)	6人(2%)	279人

〈ポポラ・サテライトに期待することはどのようなことですか〉

	期待する	どちらともいえない	期待しない	合計
同じ悩みをもつ当事者同士で集まれる場が欲しい	281人(63%)	129人(29%)	36人(8%)	446人
自分自身が活躍できる場の提供	89人(20%)	145人(33%)	209人(47%)	443人

〈主な取り組み〉

	イベント	ポポラ	サテライト
父親向け	パパといっしょにききょう公園であそぼう	86組	—
	パパのアトリエ	46組	20組
	パパと楽しむおはなし会	9組	10組
	パパといっしょにカブラであそぼう	9組	6組
妊娠期	赤ちゃんのお世話プチ体験 (プレパパ対象)	プレパパ 15人 先輩パパ 10人 (年3回)	プレパパ 13人 先輩パパ 4人 (年3回)
	赤ちゃんのお世話プチ体験 (プレママ・プレパパ対象)	プレママ 14人 プレパパ 8人 (年3回)	プレママ 6人 プレパパ 1人 先輩ママパパ 5人 (年3回)
	ひろばでの沐浴体験等(個別対応)	プレママ 51人 プレパパ 40人	プレママ 40人 プレパパ 18人
多様性	元気っ子的日	78組 188人 (年12回)	131組 298人 (年12回)
	ようこそ	24組 65人 (年12回)	19組 50人 (年12回)
	ダウン症児親子の日	—	5組 12人 先輩ママ1人
当事者主体	じぶん企画(※2)	184組 (年20回)	—

(※1) 調査対象:都筑区で12月・1月に乳幼児健診受診予定者計744人。

調査方法:電子申請もしくは乳幼児健診時に調査票を回収。(回収数計473人 回収率63.6%)

(※2) 利用者自身がやってみたいことを自ら発信し企画、開催したイベント。

1【安心・安全・心地よいひろば】

・緊急事態宣言、ひろば休館中には「ちいさなしあわせのタネおすそわけプロジェクト」として拠点登録者を対象に往復はがきを送付し、相談窓口の周知を行うとともに、コロナ禍での体験や思いを書いて返信してもらった。拠点からの一方通行にならないよう工夫し、返信されたはがきはひろば内に掲示。利用者同士が思いを共有する機会をつくることができた。また外国につながる世帯には「やさしい日本語」「英語」で作成したはがきを送付した。

・コロナ禍でひろばを利用することに不安を感じる方もいた。ひろば以外の拠点のスペースを開放する等して混雑を緩和し、臨機応変に対応することで、安心して過ごせたという声をいただいた。

・室内で過ごすことに不安のある方には、公園あそび等を紹介し、他の親子や地域の方と過ごせる場を提案した。久しぶりに他の親子と遊べたという喜びの声も聞かれた。

・HPやTwitter等を活用してひろばやイベント、地域の様子等を発信することで、それぞれのタイミングで参加を促せるよう周知した。

・サテライトが開所したことで、それまで拠点に来所が困難だった南部地域の方も、サテライトを利用する機会が増えており、北部、南部の利用者のすみわけが出来ている。またサテライトは区境に住む方、居住区の拠点が遠くて拠点を利用しづらかった方々の居場所として機能している。

・サテライトは大型商業施設内にあることで、父親、祖父母を含め家族での利用が多くみられた。平日無料の駐車場があり雨にぬれずに来られる等、利便性の良さもあり多胎児の利用も多くなっている。

様式1-1 地域子育て支援拠点事業評価シート

2【多様性のあるひろば】

- ・共通の話題や悩みを話しやすくするために、多胎児家族や多胎児妊娠中の方が集まる「ポポラにおいてよ ふたごちゃんみつごちゃん」の日や、障がい児を持つ親子の交流の場となる「ポポラへようこそ」の日を設けている。当事者同士の交流の機会となり、安心感を感じてもらえた。イベントに参加することによって、ひろば利用につながる親子もいる。
- ・地域ケアプラザで活動しているシニアサークルや生活介護事業所等の作品展示を通じて、さまざまな世代が気軽に来られる環境をつくり、多様な人がいることを感じてもらえる機会となった。今まで拠点に関わりがなかった方に拠点を知ってもらった。また作品展示期間中にワークショップを開催し、多世代交流の機会を作った。
- ・外国につながる方によるワークショップを他団体との共催で開催した。「多文化子育ておしゃべり会」「いろんな国のくらしと子育て」「世界の離乳食」等企画から当事者の方が関わり、イベントの当日は進行役として活動してもらった。外国につながる方と日本の方との多様な交流が生まれ、お互いの国の子育ての違いや相手の文化を知るきっかけとなり、互いの理解促進となった。
- ・妊娠前から気軽に利用するきっかけづくりとして、妊娠期向けのイベント「赤ちゃんのお世話プチ体験」「土曜両親教室」等を開催。土曜両親教室開催前にひろば見学の時間を設けている。出産前に拠点見学をし雰囲気を感じてもらい、当事者同士や先輩ママ・パパとの交流があることで、出産後の拠点利用につながっている。
- ・妊娠中から拠点につながるのあった方のおよそ5割が、出産後、子どもの拠点登録をしている。何かきっかけがあると妊娠中にも拠点に行きやすいという声より、マタニティコーナーを設置した。

3【ニーズ把握・親も子も育つ場】

- ・利用者からの悩みやちょっとした相談から、子どもの年齢に応じた遊びの場が欲しいという声をスタッフが汲み取り、「元氣っ子の日」(※3)を設けた。3期目振り返りの課題を受けて、コミュニティルームやお茶の間サロンを開放し、集中して遊びこめるような環境をつくり、それぞれのペースで親子で遊べる場となっている。玩具の取り合い等の場面も見られるが、見守ること、お互いさまの大切さも伝えている。また「元氣っ子の日」に参加することを目的にひろばを利用する親子も増え、拠点から足が遠のいてしまった親子の利用きっかけにもなっている。元氣っ子の日以外にも場所があいている時はスタッフが判断し年齢に合わせた玩具を出して部屋の開放を行っている。
- ・同じ悩みを持つ親子の交流の場が欲しいとの声から「ダウン症児親子の日」を設けた。これから子どもを産むという方からの参加希望もあった。先輩ママに相談もでき、子どもの成長等先の生活の見通しを話せる場となり、安心して子どもを育てる気持ちも、不安の解消につながった。
- ・当事者の視点から共通の話題で利用者同士のつながりがもてるよう、ひろば内に、「やってみたい・つながりたいボード」(※4)を設置し、自然な交流ができる工夫をした。「じぶん企画」として、当事者自身が発信することで、役割をもって活動する機会が生まれ、気軽につながるツールとして活用されている。「パパ友を作ろう」「2人目育児の会」「40代ママの会」等のテーマがあり、実現に至るまでにスタッフが寄り添って対応した。開催がきっかけとなって、当事者同士がつながり、継続していくグループがあった。
- ・父親の育児参加促進を目的とした「パパといっしょにききょう公園であそぼう」「パパといっしょにカプラ(※5)であそぼう」「パパと楽しむおはなし会」「パパのアトリエ」(※6)等父親向けのイベントを開催し、父親の育児参加とひろば利用のきっかけとなっている。父親が参加しやすいよう土曜日に開催をしている。

(※3) 2歳以上の年齢の特性に応じた遊びの場。ひろばでは出せない大型遊具や身体を使った遊び、工作や子ども同士が遊びこめる場を提供している。お互いさまの関係で見守れる場にもなっている。

(※4) 「じぶん企画」のきっかけづくりとして作成。当事者が付箋にやってみたいこと等を記入し掲示。

(※5) フランスの造形積み木。すべて同じサイズで構成されていて、その長方形の板を組み合わせて遊ぶ。

(※6) コミュニティルームやお茶の間サロンを開放し廃材や工作道具等を準備し自由にお絵描きや工作ができるスペースを提供。

様式1-1 地域子育て支援拠点事業評価シート

評価の理由(区)

- 1 定例会等を通じ、広場の環境や安全面の確保及び事故等にかかる報告を受け、確認及び助言を適宜行った。
- 2 妊娠期からの支援を目的に、拠点で土曜両親教室を実施できるよう後方支援を行った。妊娠期の方を対象にした事業について、母子健康手帳交付時にチラシを配布する等の周知を実施。
- 3 拠点の休館日を利用し、赤ちゃん会を実施し、拠点につながるきっかけを作った。
- 4 多胎児、障がい児育児等当事者に関する企画(じぶん企画)の実施について、対象者に情報提供を行った。
- 5 子育て支援者定例会、主任児童委員連絡会、こんにちは赤ちゃん訪問員連絡会、地域ケアプラザコーディネーター連絡会で拠点の活動を紹介する機会を設けている。

拠点事業としての成果と課題

(成果)

- ・サテライトを開所し、拠点に来所困難な方にとっての居場所となった。
- ・障がいを持つ親子の交流の機会に加えて、多胎児の親子や妊娠中の方を対象にしたイベントも行き、困難さを抱えやすい方に利用してもらうきっかけを作ることができた。
- ・シニアサークル等と連携したワークショップ等を実施し、多世代交流の場を作り、普段接点を持ちにくい人たちの関わる機会となった。

(課題)

- ・引き続きひろばで把握したニーズを拠点のみならず、地域の支援の場につなげていくことが必要。
- ・子どもの育ちや月齢に応じた遊びの環境がより整理されるように、居場所づくりについて工夫し、他団体の力も借りながら拡充をしていく。
- ・利用者がひろばで多世代の方に関わる機会が少ないことが課題。多世代のボランティア等を受け入れ、利用者が様々な人と関われるきっかけを創出することが必要。

振り返りの視点

- ア いつでも気軽に訪れることができ、安心して過ごせるような配慮、工夫をしているか。
- イ 居場所を訪れる様々な利用者(養育者、子ども、ボランティア等)の間に、交流が生まれるように工夫しているか。
- ウ 多様な養育者と子どもを受け入れる配慮や工夫をしているか。
- エ 養育者と子どものニーズを把握するための工夫をしているか。
- オ 把握されたニーズを区関係機関と共有し、ニーズに応じて必要な支援や新たな事業、事業の見直しにつなげているか。
- カ 子どもの年齢・月齢に応じた遊びの環境が整備されているか。
- キ 子ども同士の関わりが尊重され、子どもが健やかに育つために必要なことに養育者が気づき、学ぶ機会を提供する場となっているか。
- ク 養育者同士が相談、情報交換し、課題解決し合う仕組みや仕掛けがあるか。

2 子育て相談事業

目指す拠点の姿	(参考) 3期目振り返りの課題	自己評価 (A~D)	
		法人	区
①養育者とスタッフとの間に安心して相談できる信頼関係ができ、気軽に相談ができる場となっている。	・拠点での専門相談について区役所と連携し、各々の相談機能について理解を深め、相談機能の分担を考えていく必要がある。	A	A
②相談を受け止め、内容に応じて、養育者を関係機関につなげている。また、必要に応じて継続したフォローができています。		B	B

評価の理由(法人)

(主なデータ)

<相談件数>

ひろば相談:ひろばスタッフによる相談(栄養士、障がいのある子、アレルギーのある子を育てている先輩ママ等)

専門相談:臨床心理士、言語聴覚士、助産師、歯科衛生士とピア相談員(※7)による相談等

◆拠点

<ひろば相談>

	H30年度		R4年度	
件数	1,547件		1,869件	
主な相談内容	地域情報	23%	子どもの生活	33%
	子どもの生活	20%	就園・就学	16%
	就園・就学	18%	地域情報	12%

◆サテライト

<ひろば相談>

	R4年度	
件数	1,151件	
主な相談内容	子どもの生活	22%
	就園・就学	18%
	子どもの健康	14%
	子どもの発育	14%

<専門相談>

	H30年度		R4年度	
件数	138件		122件	
主な相談内容	子どもの発育	62%	子どもの発育	58%
	親自身	16%	親自身	17%
	子どものしつけ	12%	子どものしつけ	9%
			子どもと家庭	9%

<専門相談>

	R4年度	
件数	90件	
主な相談内容	子どもの発育	50%
	子どもの健康	28%
	子どもの生活	18%

【令和4年度都筑区子育て拠点ポポラアンケート】

<ポポラ・サテライトでの気軽な相談>

	あてはまる	どちらとも いえない	あてはまらない	合計
スタッフは気軽に相談できる雰囲気がありますか?	228人(82%)	47人(17%)	4人(1%)	279人

(※7)障がいのある子や外国につながりをもつ子の子育てをしている方

様式1-2 地域子育て支援拠点事業評価シート

1【気軽に相談の場】

- ・初めて拠点・サテライトを利用する方等に相談事業の仕組みについて丁寧な説明を行っている。
- ・利用者から相談や質問、問い合わせが多い内容について、情報ファイルやロコミファイル等を、利用者が気軽に手にとれるようにひろばに設置。随時情報を更新した。スタッフが利用者に声かけをするきっかけにもなり、相談につながっている。（「妊娠期」「発達・障がい」「外国籍」「幼稚園・保育園・児童発達支援等の施設のロコミ情報」「地域情報」等）
- ・「情報サロン」や「お茶の間サロン」等ひろば以外での相談や、拠点に来所困難な方の電話での対応等、相談者が話しやすい環境で相談に応じた。
- ・保育所の入所等に関して、区の保育・教育コンシェルジュの相談の場を設けた。区の相談窓口に足を運びにくい方や、祖父母、これから親になる方等の子育て当事者以外にも保育・教育コンシェルジュの周知ができ、相談につながる機会が増えた。

2【安心して相談できる場】

- ・利用者との信頼関係が作れるようスタッフが気持ちに寄り添った支援を心掛けている。ひろばでの様子を見守りながら、ゆっくり時間をかけて寄り添い傾聴することで、会話の中から相談につながるが多い。
- ・言語聴覚士への言葉の相談等から、発達の相談や医療機関、利用者支援事業につながるがあった。
- ・母親以外にも父親や祖父母、里親からの相談等、多様な背景をもつ養育者からの相談が増えた。
- ・他区利用者からの相談には、必要に応じて横浜子育てパートナーにつなぎ、他区の保健師・横浜子育てパートナー等を紹介した。
- ・拠点だけでは対応が難しい相談や、医療機関等専門的な機関へつながる前の相談の場として、区、助産師、歯科衛生士、外部機関や施設と一緒に、拠点で気軽に相談できる場を設けた。
- ・専門相談員との振り返りを行い、相談内容や支援方法をスタッフで共有し、ひろばや地域での見守り、相談業務に活かした。
- ・「なるほどトーク」(※8)では、妊娠期の方も興味関心をもつテーマを設定し、妊娠期から拠点での相談をより身近に感じてもらうきっかけ作りを行った。また拠点に来所困難な方も参加しやすいよう、オンラインでの開催も行った。
テーマ:「赤ちゃんのころを知ろう」「ことばの始まり」「イヤイヤ期の受け止め方」
<平成31(令和元)年度~令和4年度>
全12回開催(平成31、令和2年度は、コロナ感染症及び台風のため中止あり)
オンライン開催:3回/25組参加

3【関係機関との連携】

- ・相談内容に応じて、区や、利用者支援事業・横浜子育てサポートシステムにつなぎ、必要に応じて継続した支援ができるように対応し、関係機関と連携して見守った。
- ・地域のネットワークを活かし、妊娠期から切れ目のない支援や、継続的な見守りにつなげることができた。

4【周知】

- ・相談事業専用のチラシやひろばの掲示を作成し、相談員のプロフィールや写真をよりわかりやすく公開。利用者が安心して相談できる場として周知した。地域の子育て支援施設や医療機関等から専門相談に繋がる方もいた。
- ・相談日をひろばや拠点広報誌(ポポラペーパー)でわかりやすく伝え、Twitterでのリアルタイムな周知に努めた。拠点広報誌やTwitterを利用した周知により、拠点利用者以外からの相談にもつながっている。

(※8)専門相談員による小規模グループでの座談会

様式1-2 地域子育て支援拠点事業評価シート

評価の理由(区)

- 1 定例会や子育てパートナーカンファレンス等で現状を把握し、対応等の助言を行った。
- 2 プライバシーに配慮して多様な相談に対応できるよう、個人情報保護研修を行った。
- 3 保育・教育コンシェルジュによる保育園情報の提供・相談等を行った。
- 4 福祉保健課の協力で歯科衛生士を派遣し、拠点で相談の機会を設けた。
- 5 専門相談利用後のフォローが適切に行われるよう、必要な助言をし、地区担当保健師へつなぐ等、後方支援を行った。今後はより適切なタイミングで情報共有できるよう研修等企画していく。

拠点事業としての成果と課題

(成果)

・特別養子縁組家庭、里親、育てにくさ(発達、虐待)等、様々な背景をもつ方が、安心して気持ちや不安を話せる場となっており、ひろば相談や専門相談を通じて、他事業(横浜子育てサポートシステム、人材育成、利用者支援)、区や他施設へとつながるきっかけにもなっている。

(課題)

必要な方に、適切なタイミングで、適切な相談機関につなげるよう、拠点と区の連携や、各相談機関の機能について理解を深めていく。

振り返りの視点

- ア 養育者が相談しやすい仕組みづくりや工夫をしているか。
- イ どのような相談に対しても傾聴し、相手に寄り添う相談対応を行っているか。
- ウ 相談内容の傾向を把握し、振り返りを行い、望ましい対応の検討や共有に努めているか。
- エ 各種専門機関の役割を把握し、養育者への効果的な支援を行うための連携、連絡体制を作っているか。
- オ 専門的対応が必要と考えられる相談について、適切に対応しているか。
- カ 関係機関とつながった後にも、役割分担に応じて、継続的な関わりを持っているか。

3 情報収集・提供事業

目指す拠点の姿	(参考) 3期目振り返りの課題	自己評価 (A~D)	
		法人	区
①区内の子育てや子育て支援に関する情報が集約され、養育者や担い手に向けて提供されている。	・紙情報を手渡ししていくことを大切にしているが、更新作業負担が大きいことを踏まえて情報発信の仕方、伝え方の工夫を検討し続けていく必要がある。 ・養育者の情報発信の場を増やしていく。	A	A
②子育てや子育て支援に関する情報の集約・提供の拠点であることが、区民に認知されている。		A	A
③拠点の情報収集、発信の仕組みに、養育者や担い手が積極的に関わっている。		A	A

評価の理由(法人)

(主なデータ) R4年度

<つづきチルコロMAP(※9)> 12,000部発行

<Twitter>フォロワー数推移

H29年度	H30年度	H31年度	R2年度	R3年度	R4年度
868人	1,001人	1,194人	1,501人	1,721人	2,013人

<PR BOXの活用>地下鉄の駅での拠点広報誌・チラシ等の配架 8ヶ所 (2ヶ月に1回配架)

<区両親教室・拠点土曜両親教室参加者への情報提供> 168人(区両親教室)、520人(拠点土曜両親教室)

【令和4年度都筑区子育て拠点ポポラアンケート】

<ポポラ・ポポラサテライトの利用目的>

	あてはまる	どちらとも いえない	あてはまらない	合計
ポポラのHPやSNSからの子育て情報入手	97人(36%)	77人(28%)	99人(36%)	273人
スタッフやチラシなどからの子育て情報入手	182人(66%)	48人(17%)	46人(17%)	276人

(※9) 地域別に子育てに役立つ情報と地図を掲載した子育てMAP

1【情報の集約、提供】

- ・地域のサロンや公園遊びへの参加等、ネットワーク活動を通じて地域の情報を収集し、ひろばやHP・Twitter等を通じて情報を提供している。
- ・各エリアのネットワーク活動の中で、地域の子育て情報をまとめた地域子育てMAPの作成、更新に協力している。
- ・都筑区民まつりや、地域のおまつりへ参加し、子育て世代だけでなく幅広い世代の区民に対して、拠点の周知や、拠点が収集した地域の子育て情報の提供を行っている。
- ・こんにちは赤ちゃん訪問員の定例会・母子訪問員定例会等、地域で活動する支援者の会合に出向き、拠点の紹介等を行い、地域の支援者を通じて、必要な方へ情報が届くように協力を依頼。
- ・拠点広報誌に地域情報等を掲載。子育て世代のみでなく、地域の方に向けての情報発信も行っている。

2【来所困難な方への情報提供】

- ・来所困難な方がHPやSNSを通じて必要な情報が入手できるよう、現在の当事者ニーズに合わせたHPのリニューアルや、Instagramの立ち上げを含めたSNSの活用を検討している。
- ・外国につながる方が拠点の情報を調べたり、地域の子育て情報が入手しやすくなるよう、外国人支援をしている団体と一緒に、外国につながる子育て中の方へのヒアリングを行った。
- ・地下鉄の駅のPR BOXを活用し、来所しなくても拠点情報が入手できるよう、拠点広報誌やチラシを配架している。
- ・ネットスーパーの利用者に対して拠点のチラシを配布する等、地域の企業と連携した情報提供の仕組みを検討している。
- ・産院や児童発達支援事業所等の利用者が拠点を利用するきっかけになるよう、拠点広報誌やイベント等のチラシ配架を施設に依頼。施設に合わせて配架するチラシを選択する等の工夫をしている。

様式1-3 地域子育て支援拠点事業評価シート

3【情報提供の工夫】

- ・外国につながる方が参加しやすいイベントのチラシ(公園遊び等)を「やさしい日本語」と「英語」で作成した。また、電話での申込みが困難な外国につながる方向けのイベント申込みにWebの申込フォームを活用する等、必要な方へ情報が届きやすい工夫をしている。
- ・妊娠期の方向けのチラシを母子健康手帳に入るサイズで作成したり、産後に必要な情報は、必要な時期に最新の情報にアクセスできるようにHPへアクセス可能な二次元コードを掲載する等、利用者目線で使いやすいチラシになるように工夫をしている。
- ・情報サロンにデジタルサイネージを設置。当月のイベントの情報をスライドで配信する等、拠点スタッフを介さなくても利用者自身が最新の情報を入手しやすい工夫をしている。
- ・拠点HP内に「子サポのお知らせ」ページを増設。会員のみでなく、会員以外の方に対しても、横浜子育てサポートシステムの情報をタイムリーに発信できる仕組みを作った。

4【養育者と共に情報を発信する仕組み】

- ・養育者自身が地域の情報収集、取材等を行った、区内の地域情報を掲載した「つづきチルコロMAP」を作成している。
- ・ひろば利用者から要望の多かった情報(幼稚園・保育園・児童発達支援事業所・地域情報等)を、ひろば利用者から収集し、「ロコミ情報」として提供している。
- ・養育者自身が情報を発信したり、収集できるきっかけづくりとして「やってみたい・つながりたいボード」を設置。養育者自身の情報交換の場としても活用されている。

評価の理由(区)

- 1 すべての赤ちゃん会及び子育て支援者会場において、拠点広報誌を配布することで拠点の利用につながっている。
- 2 定例会において、区の事業情報等について、随時共有している。
- 3 各地域の子育てカレンダー・子育てマップの作成・更新に区も参加し、地域の支援者主体の情報発信がされるようサポートを行った。また、赤ちゃん会、訪問等で周知を実施。

拠点事業としての成果と課題

(成果)

- ・HPやTwitterを通じて、適宜最新の情報を利用者に届けられるよう、情報発信の仕方を工夫できた。
- ・駅のPR BOXに拠点広報誌を配架する等、利用者以外の方に手に取ってもらえるよう工夫できた。
- ・「じぶん企画」として、養育者自身で交流の機会や企画を作り、それぞれが自らの持つ情報等を伝え合う機会を設けられた。
- ・地域から提供されたチラシや、コロナ禍においては他施設の利用情報を収集しHPに掲載する等、拠点以外の施設の情報もHPやTwitterで発信できた。

(課題)

- ・児童発達支援事業所等養育者が求める情報に変化があるため、養育者のニーズを把握し続ける必要がある。
- ・紙のチラシの配布やHP・Twitterでの情報発信は行っているが、現在の当事者ニーズに合ったSNSを利用して情報を発信する等、情報提供方法を検討していく必要がある。

振り返りの視点

- ア 養育者や担い手が必要としている情報が何かをとらえ、区内の幅広い地域の子育てや子育て支援情報を収集・提供しているか。
- イ 来所が困難な養育者や担い手も含め、情報を入手しやすいよう、さまざまな媒体や拠点以外の場を通して情報発信しているか。
- ウ 利用者が情報を入手しやすく、自ら選べるひろば内の工夫をしているか。
- エ ネットワークを活かして情報を収集し、を養育者や担い手に提供しているか。
- オ 様々な子育て支援情報を拠点が集め、提供していることを広く区民に周知しているか。
- カ 養育者や担い手から拠点到情報が届けられる仕組みや工夫があるか。
- キ 情報収集・提供の企画に養育者や担い手が関わる仕組みや工夫があるか。

4 ネットワーク事業

目指す拠点の姿	(参考) 3期目振り返りの課題	自己評価 (A~D)	
		法人	区
①地域の子育て支援活動を活性化するためのネットワークを構築・推進している。	・区内各エリアに合ったきめ細かい対応を地域の方に寄り添って一緒にすすめていく必要がある。	A	A
②ネットワークを活かして、拠点利用者を地域へつないでいる。	・今後の区全体でのネットワークのあり方について検討していく必要がある。(ネットワーク会議の持ち方、エリア分けの空白部分への対応等)	A	A

評価の理由(法人)

(主なデータ)R4年度

<子育てネットワーク会議>(※10)参加団体数:第1回15団体/25名、第2回14団体/19名

<子育てネットワーク交流会>(※11)参加者数:87名

<他施設・他団体と共催した主なイベント>開催回数・参加人数

	連携施設・団体	開催回数	参加組数
多世代交流	加賀原地域ケアプラザ	4回	28組
	中川地域ケアプラザ	4回	21組
外国人支援	NPO法人Sharing Caring Culture	6回	40組
企業連携	イトーヨーカドー	1回	52組

<地域の公園あそび・サロン>開催回数・参加人数

エリア	事業名	開催数/予定数	参加組数(のべ)	支援者参加者数(のべ)	支援者属性
山田	山田富士公園であそぼう!	7回/10回	104組	43人	主・地区C・CP・区・拠点
中川	タンポポひろば	12回/12回	116組	97人	主・ボラ・CP・区・拠点
勝田・茅ヶ崎	わいわい子育てサロン	11回/11回	107組	83人	主・民・保活・こん赤・ボラ・つどい・CP・区・拠点
荏田	外あそびいく・青空赤ちゃん会	9回/10回	43組	74人	主・民・こん赤・プレイパーク・コミハ・市立・CP・区・拠点
都田	都田地区子育てサロン	6回/6回	45組	97人	主・民・保活・町内会・JA・子育て支援者・市立・CP・区・拠点
川和・都筑ふれあいの丘	かわわ★わーい	12回/12回	47組	62人	主・つどい・市立・CP・区・拠点
川和・都筑ふれあいの丘	あそびの広場~第九公園で遊ぼう~	11回/12回	33組	47人	主・サークル・つどい・市立・CP・区・拠点
佐江戸・加賀原	ざんなん公園であそぼう!	10回/10回	100組	56人	主・民・つどい・子育て支援者・CP・区・拠点
池辺	下敷根公園であそぼう!	10回/10回	108組	74人	主・民・地区社協・CP・区・拠点

※支援者属性:主/主任児童委員、民/民生委員・児童委員、保活/保健活動推進員、こん赤/こんには赤ちゃん訪問員、ボラ/ボランティア、地区C/地区センター、コミハ/コミュニティハウス、つどい/親と子のつどいの広場、市立/市立保育園、CP/地域ケアプラザ

<あつまれ都筑のニューフェイス(※12)>

	開催会場数(年2回開催)	参加組数
H30年度	14会場	338組
R4年度	16会場	257組

【令和4年度地域子育て支援者アンケート結果】(※13)

<拠点認知度>

	知っている	知らない
子育て支援センター「ポポラ」を知っていますか?	97%	3%
子育て支援センター「ポポラサテライト」を知っていますか?	92%	8%

<保護者や関係者に子育て支援センター「ポポラ・ポポラサテライト」案内したことはあるか>

	いつも	時々	数回	していない
保護者や関係者に子育て支援センター「ポポラ・ポポラサテライト」を案内したことはありますか?	41%	24%	20%	15%

様式1-4 地域子育て支援拠点事業評価シート

<子育て支援センター「ポポラ・ポポラサテライト」がどのような機能を提供することを期待するか>

①子育て等の情報提供	98.2%
②保護者の友達作りの場の提供	94.1%
③地域と繋がるきっかけづくり	93.5%
④同じ悩みをもつ当事者同士で集まれる場の提供	92.9%

(※10) H20年度より開催。区内子育て支援施設の連携会議。

R4年度参加団体: 親と子のつどいの広場、地域ケアプラザ、市立保育園、区社会福祉協議会、区地域振興課、区子ども家庭支援課、拠点。

(※11) H22年度より開催。区内の子育て支援関係者が集まり、交流会を行う。

R4年度参加団体: こんにちは赤ちゃん訪問員、子育て支援者、保健活動推進員、主任児童委員、乳幼児一時預かり施設、親と子のつどいの広場、地域ケアプラザ、地区センター、コミュニティハウス、市立保育園、私立保育園、区社会福祉協議会、区地域振興課、区子ども家庭支援課、拠点。

(※12) 区内に転入してきた親子向けイベント。ネットワーク会議より発足し、区内子育て支援施設等、各所で開催している。

参加団体: 親と子のつどいの広場、地域ケアプラザ、市立保育園、子育てサロン、鴨池公園こどもログハウス、拠点。

(※13) 調査対象: 都筑区で子育てに資する、子育て支援者213人に配布。調査方法: 調査票に記入していただき、担当に手渡しもしくは郵送。(回収数計172人 回収率80.8%)

1【関係機関・他団体・企業とのネットワーク構築と推進】

・「子育てネットワーク会議」では、各施設の活動状況を踏まえながら、区全体の課題を共有。必要な取り組みの検討、実行に向けての体制作りを実施している。令和5年度より、地域での障がい児支援の強化を図るため新たに2施設(横浜市北部地域療育センター、つづき地域活動ホームくさぶえ)が参加。

・「子育てネットワーク交流会」を開催。継続して開催していることで、参加団体も広がり顔の見える関係づくりから課題の共有、エリア活動の展開が行われており、ネットワーク活動が強化されている。

・都筑区地域福祉保健計画推進委員会や、子ども・困窮世帯支援関連団体情報交換会等、区内の関連団体が参加している会議に出席。それぞれの機関が持っている情報を収集すると共に、相互の情報交換を行っている。

・他施設、他団体等の関係機関と連携をし事業を行った。拠点だけでは不足している支援体制の充実や互いの置かれている状況等の相互理解を深め、継続的に連携の強化を行っている。(シニアサークルとの交流/地域ケアプラザ、里親支援/北部児童相談所、障がいをもった外国につながる親子の支援/横浜市北部地域療育センター、外国につながる方との子育てワークショップ開催/NPO法人Sharing Caring Culture(※14)、パン販売や作品展示/生活介護事業所等)

・NPO法人アクションポート横浜(※15)と連携することで、若者等の異なる視点から子育て支援活動の活性化に努めている。

・サテライトがあるらぼーと横浜内に店舗をもつ企業(イトーヨーカドー、無印良品)や「メイドインつづき参加企業」(※16)等との連携を行い、子育てを地域で支える風土づくりを進めている。

・Tsunami International Friendship (TIF) (※17)を発足。連携を基盤とした新たな共生社会の実現を目指して、3者連携会議を行った。協力団体や企業、区の課を超えた連携等も広がっている。外国につながる家族の子育て、暮らし、多文化共生での連携を推進し、拠点利用者のみならず地域で暮らす外国につながる方々の支援を強化している。

2【ネットワークを活かし、利用者のニーズに合わせた地域へのつなぎ】

・地域のつながり、区内の顔の見える関係づくりを目的にエリアごとに担当者をおき、拠点スタッフが公園遊び、子育てサロン、おまつり、子育て情報MAP制作等の活動に参加している。ネットワークを活かし、拠点利用者を丁寧に地域につなぎ、地域の支援者と共に養育者に寄り添うことができている。

・サテライトができたことで、拠点スタッフが区内南部のエリア活動にも積極的に参加をし、利用者を丁寧に丁寧につないでいる。また、南部地域にあるケアプラザやコミュニティハウス、新設された都田地区センター都田地域ケアプラザとの連携を行い、地域との連携がさらに強化されている。

・多様な拠点利用者(外国につながる方等)に地域で活動している団体等を紹介し、丁寧に丁寧につなぎを行っている。また当事者が支援することに興味のある場合にも団体へのつなぎを行っている。

・転入者が多い区の特性を考慮し、地域ケアプラザ、子育てサロン、親と子のつどいの広場等と協力し、「あつまれ～都筑のニューフェイス」を区内16会場で開催。区内全域で開催をしていることで、新しい施設や団体が会場として参加しやすく、転居してきた家族がより足を運びやすくなっている。

(※14) 在住外国人支援をしているNPO法人。

(※15) 若者とNPOをつなぎ、地域を盛り上げていくことを目標としたNPO法人。

(※16) “都筑区内の中小製造業の主体的な発展と連携を推進するための事業”に参加をしている企業

(※17) 都筑多文化・青少年交流プラザ(通称: つづきMYプラザ)、NPO法人Sharing Caring Culture、拠点の3者事業連携会議。

様式1-4 地域子育て支援拠点事業評価シート

評価の理由(区)

- ・全体会の位置づけである子育てネットワーク会議について、年2回実施し、地域課題や各地域での取り組みについて共有できるよう務めた。また、地域での課題に合わせ、参加者の検討を行った。
- ・「子育てネットワーク交流会」を継続し、支援者同士が顔を合わせ、お互いの活動を認め合い、確認することができ、参加者の高い満足度を得られている。
- ・地域での取り組みを子育てネットワーク交流会を通して共有することで、他の地域での取り組みに広げられた。
- ・拠点と企業・団体との連携において、間に入り調整等を行った。

拠点事業としての成果と課題

(成果)

- ・子育てネットワーク交流会、ネットワーク会議を継続して開催していること等から、各地域のネットワークが活性化し、他地区の取り組みを取り入れて新しい活動が生まれた。
- ・企業や団体との連携を強化し、子育てにやさしいまちづくりの基盤や支援体制の充実を図った。

(課題)

- ・地域ごとの取り組みに差があるため、地域の方に寄り添って支援の充実を一緒に進めていく必要がある。
- ・区全体で共通している課題について、各地域を巻き込んで課題解決に取り組んでいけるよう活動を支援していく。
- ・施設、団体、企業等とさらなる連携強化を図り、お互いの立場を確認しながら支援の拡充を目指していく。

振り返りの視点

ア 地域の子育て支援関係者が、互いに知り合い、理解し、子育て家庭の状況及び子育て支援の情報や課題を共有するための場、機会をつくりだしているか。

イ 地域の子育て支援関係者が協力し、支え合えるように、関係者同士をつないでいるか。

ウ 子育て家庭や地域の子育て支援関係者のニーズを踏まえ、子育て支援分野に限らず、様々な社会資源と連携・協力した取組を実施しているか。

エ 養育者や子育て支援活動に関心のある人を身近な地域の子育て支援の場や地域の活動につなげているか。

5 人材育成・活動支援事業

目指す拠点の姿	(参考) 3期目振り返りの課題	自己評価 (A~D)	
		法人	区
①地域の子育て支援活動を活性化するため、担い手を支えることができている。	・新たな担い手育成のためには時間が必要であり、活動に参加される方の意思をくみ取りながら継続して寄り添っていく。 ・子育て支援に関心のあるより多くの方が活動に参加するきっかけづくりをどのように進めていくのか検討が必要である。	A	A
②養育者に対して地域活動の大切さを伝えるとともに、地域の子育て支援活動に関心のある人が、活動に参加するきっかけを作っている。		A	B
③広く市民に対して、子育て家庭を温かく見守る地域全体での雰囲気づくりに取り組んでいる。		A	B
④これから子育て当事者となる市民に対して、子育てについて考え、学び合えるように働きかけている。		B	A

評価の理由(法人)

(主なデータ)R4年度

<チルコロウィーク(※18)>12日間、16イベント 参加団体14団体 参加者180組400人

<じぶん企画一覧>

企画名	開催数	参加親子
ゆるっとママ会	5回	19組
おゆずり会	2回	68組
北海道の会	2回	12組
英語で子育てについてしゃべろう!	1回	3組
特別養子縁組家族のおしゃべり会	2回	12組
コテコテの関西弁あつまれ	2回	11組
育児中/パパの会	1回	4組
パパ友作りたい人集まれ	1回	4組
ワーママになる前にいろいろお話ししましょう	2回	16組
2人以上育児のお悩み・体験談	1回	5組
港北区のみんな集まれ!	1回	6組

【令和4年度ポポラ利用者アンケート(※19)】

<「じぶん企画」として、自分でやりたい企画を実施できる取り組みを応援しています。このような取り組みに興味がありますか>

	興味がある	興味がない
ポポラ	68人(45%)	82人(55%)
サテライト	58人(39%)	92人(61%)

<ポポラ(※20)> 会員41人(定例会10回、参加者数のべ104人/イベント実施回数3回、参加者数のべ34人/その他活動回数17回、参加者数のべ34人)

<土曜両親教室参加者数>

	ポポラ	サテライト
参加組数	144組	118組
プレママ	143人	118人
プレパパ	143人	116人
計	286人	234人

(※18) 地域の子育てに関わる人たちが、知り合うためのきっかけ作りとして行うイベントウィーク。イベントや講座、団体・施設紹介、サークル活動の紹介等を行う。参加団体/子育てサークル、親子のつどいの広場、地域の読み聞かせ団体等。

(※19) 調査対象:ポポラとサテライトのひろば利用者各150人 調査方法:Googleフォームまたは紙での回答

(※20) 地域の方が参加できるポポラのボランティア。好きなことや得意なことを活かし、写真撮影や季節の工作イベント、イベントでの見守り保育等で活動中。定例会/毎月1回程度開催。

1【担い手を支える】

- ・「子育てネットワーク交流会」(※21)を毎年継続して開催。講師を招き、活動のヒントをもらう等の学びの機会を作った。支援者同士の情報共有と交流の場を設け、顔の見える関係づくりを行っている。妊娠期からの支援について課題の共有や、「地域・施設ごとの具体的な取組み」を紹介しあうことで、それぞれの地域・施設等で新たな取組みが生まれる可能性も広がった。
- ・こんにちは赤ちゃん訪問員へ拠点の周知を行い、情報を提供することで、訪問員の活動支援につながっている。

2【養育者を支える】

- ・地域の子育てに関わる人たちが知り合うきっかけの場として、チルコロウィークを開催。拠点の立地を活かしテナント内の企業と連携を行い、企業の“子育てを応援する地盤作り”へとつなげることができた。
- ・「ダウン症児親子の日」は、先輩当事者の助言を元に初めてサテライトで開催をした。イベント当日は、当事者ならではの目線で参加者に寄り添うことができ、参加者同士が安心してつながる場となった。
- ・「じぶん企画」では、当事者自身が“自分の好きなこと”や“興味のあること”を発信することで、役割をもって活動する機会が生まれている。当事者だけでなく家族やこれから子どもを迎える方等の参加もあった。ひろばとは違う居場所となり、定期的につながり場として開催されている。また「特別養子縁組家族のおしゃべり会」等、当事者自身が抱える悩みを話せる場にもなっている。
- ・「プレパパ赤ちゃんのお世話プチ体験」で、プレパパとして参加していた方が、その後プチ体験やひろばで先輩パパとして活躍し、拠点利用者の循環が生まれている。拠点が、父親同士で子育てについて学び合う場となっている。

3【子育てに優しい地域作り】

- ・多世代、多様な人をつなぐきっかけづくりのために、地域ケアプラザや外国人支援をしている団体と連携をして、おしゃべり会やワークショップを開催。親子交流を通してお互いの理解促進を図った。
- ・自治会町内会が主催する地域のおまつりや都筑区民まつり等へ参加をして、子育ての現状を広く区民に周知。また、これから子育て当事者となる学生等に沐浴体験を実施。体験を通して、学生や地域の方々への理解促進を図った。
- ・ボランティア「ボポメイト」の活動では、季節の工作イベント、公園あそび、イベントでの見守り保育等、それぞれが得意なことで活躍できる場を提供し、多様な世代と親子が交流する場ともなっている。これまでシニア層の参加が多かったが、参加する方の世代が広がり、活動の幅も広がっている。

4【次世代育成】

- ・年間を通して看護実習生やボランティアを受け入れ、これから社会参加する学生に学びの場と子育て当事者との交流の機会を提供した。
- ・地域在住の高校生防災士が講師になり「かぞくで防災ワークショップ」を開催。地域の高校生と一緒に「乳幼児がいる家族の防災」について考え、普段接点の少ない高校生と親子の相互理解の場となった。
- ・「ヤマトつながるプロジェクト」(※22)に参加。企業、学生、障がいのある方、拠点の4者が連携してアートプロジェクトを実施。開催したイベントには、拠点利用者親子も参加をし、普段接点のみにくい人たちが一緒に活動をする事で相互交流の場となり、お互いの背景等の相互理解が深まった。また、イベント終了後もそれぞれの関係性が継続されている。
- ・区内の中学校に出向き、少子化という課題について解決策を共に考える機会をもった。
- ・これから出産を迎える方の学びの場として「土曜両親教室」、「赤ちゃんのお世話プチ体験」等を実施。

(※21) 講義内容:令和3年度「妊娠期からの子育て支援」講師/棒田明子氏

令和4年度「つづきのまちで、安心して子育てできる仕組みを具体的に考えてみよう!」事例発表/2件

(※22) ヤマト福祉財団の助成のもと、ヤマト運輸労働組合青年部とNPO法人アクションポート横浜の学生と一緒に福祉のボランティアを企画・実施。地域や福祉に貢献するプロジェクト。

評価の理由(区)

- 1 子育てネットワーク交流会、外遊び連絡会等を通じた学びの場を提供したことで、エリアネットワーク及び地域ごとの活動が増えている。
- 2 広報よこはま都筑区版において、子育て支援活動を紹介し、その必要性を周知した。また、区の児童虐待防止月間のパネル展示の際に、拠点紹介のパネルを展示し、啓発を行った。
- 3 拠点において土曜両親教室を実施し、妊娠期から子育てについて考え学び合える場とした。

拠点事業としての成果と課題

(成果)

- ・子育て当事者に子育ての先輩として体験談を話す場等を設け、当事者自身が話しやすい場を作ることにつながった。
- ・拠点スタッフが地域に足を運んで一緒に活動を行うことで、地域の担い手を支えている。
- ・学生ボランティアや実習生等を受け入れて、子育て当事者との交流の機会をつくり、子育てについて学ぶ機会や場を提供した。

(課題)

- ・新たな地域人材の育成は、中・長期的な視点を持ちながら進めていく必要がある。地域活動への興味関心をもってもらえるような機会の提供を増やしていく。
- ・これから子育ての当事者となる学生等の市民に対して、子育て中の親子とふれあい、学び合う機会をつくっていく。

振り返りの視点

- ア 地域で子育て支援に関わる人が増えているか。かつ新たな担い手を発掘・養成する取組がなされているか。
- イ 子育て家庭や担い手のニーズを踏まえ、活動意欲の向上やスキルアップにつながる取組がなされているか。
- ウ 地域の子育て支援活動がより充実されるよう、必要に応じて新たな活動希望者を結び付けているか。
- エ 養育者が地域を身近に感じ、地域の活動に関心を持てるように働きかけているか。
- オ 活動希望を丁寧に受け止め、拠点内の活動や身近な子育て支援活動等に結び付けているか。
- カ 子育ての現状や子育て支援の必要性を周知・啓発しているか。
- キ 子育て家庭(妊娠期の方を含む)を温かく見る気持ちを持つことができるように働きかけているか。
- ク これから子育て当事者となる市民と子育て中の親子がふれあい、学び合う機会や場を作っているか。

6 横浜子育てサポートシステム区支部事務局運営事業

目指す拠点の姿	(参考) 3期目振り返りの課題	自己評価 (A~)	
		法人	区
①子育てサポートシステムに、多くの区民の参画が得られている。	・データから、入会説明会から登録につながる割合が少ないことがわかったため、参加者が登録につながるよう工夫が必要である。	B	B
②養育者にとって、必要な時に利用しやすい事業となっている。	・横浜子育てサポートシステムだけでは支援できないことが増えてきたが、それに代わる社会資源が不足していると感じることが多い。	A	A
③会員が地域の支え合いの良さ、大切さを理解しながら、利用や活動を継続できるように、支えることが出来ている。	・事業の主旨である「地域のささえあい」を超えた利用目的の場合、提供会員の理解を得られにくいこともある。より一層、「地域のささえあい」であることを周知し、理解を深めていきたい。	A	A
④養育者の利用相談内容に応じて、子育て相談や他機関等の情報を提供し、必要な支援につなげている。	・提供会員と利用会員数の地域差があり、利用や活動を進めていく上での課題となっている。	B	A

評価の理由(法人)

(主なデータ)

<会員数>

	利用会員	提供会員	両方会員	会員合計
H30年度	592人	150人	53人	795人
R4年度	803人	156人	33人	992人

<入会説明会開催回数>

	集団説明会	出張説明会	個別説明	合計
H30年度	25回	11回	38回	74回
R4年度	48回	11回	50回	109回

<登録者数>

H30年度	入会説明会参加者数	登録者数	登録割合	R4年度	入会説明会参加者数	登録者数	登録割合
利用会員	357人	199人	56%	利用会員	349人	291人	83%
提供・両方会員	39人	28人	72%	提供・両方会員	42人	19人	45%
計	396人	195人	49%	計	391人	310人	79%

<活動件数>

	コーディネート件数	事前打合せ件数	活動件数	内ひろば預かり件数
H30年度	210件	165件	3,376件	17件
R4年度	340件	237件	3,341件	212件

<主な活動内容>

	H30年度	R4年度
習い事・塾の送迎	589件	871件
保育所・幼稚園の迎え	606件	642件
提供会員宅預かり	282件	194件
利用会員宅預かり	243件	529件
学童保育の送迎	163件	28件
拠点・親子のつどいの広場での預かり	17件	212件

1【子育てサポートシステムの周知】

- ・「広報よこはま都筑区版」、小中学校PTAへのチラシ配布、駅構内のPRボックス等で地域への周知を行ったことにより、拠点利用者以外の方の入会説明会参加につながった。
- ・地域のおまつり等で周知を行い、子育て世代以外の地域の方にもより広く「横浜子育てサポートシステム」について知ってもらい、興味を持ってもらう機会となった。
- ・両親教室等で妊娠期の方へ向けて周知を行ったことにより、入会説明会への参加につながった。
- ・拠点HP内に「子サポのお知らせ」ページを増設。これまで会員への連絡手段は郵送のみだったが、事務局からの情報発信をHPでできるようにした。サポート活動の様子等も掲載し、登録を検討中の方に向けて情報発信にもなっている。
- ・気軽にひろばでの預かりを利用してもらえるように、利用する際のフローチャートを作成し、ひろばで掲示した。掲示を見て初めてのサポート依頼や、未登録の方の入会説明会への参加につながった。また、ひろばでの預かりが増えることで、ひろば利用者が実際の預かりの様子を目にする場面も増え、子どもを預けることに対するの安心感につながっている。
- ・地域ケアプラザの協力を得て、連合町内会を通し、会員数が少ない地域の自治会町内会の掲示板に提供会員募集のチラシを掲示、周知を行った。

2【活動への理解促進】

- ・都筑区民まつりへの参加をきっかけに、青少年指導員の定例会に参加。「横浜子育てサポートシステム」概要の説明を行い、地域の方への周知、理解促進とともに、提供会員増員のための協力依頼を行った。
- ・イトーヨーカドーのネットスーパー配達時にチラシを同梱予定。拠点に足を運べない方へ向けての周知を行うとともに、地域の方へ提供会員の会員登録募集を行う。また、企業と連携することで、企業に向けての地域子育て支援の理解をすすめていくきっかけとなっている。
- ・区で配布している「都筑区に新しく来た外国人のためのウエルカムキット」に、「やさしい日本語」で制作した子育てサポートシステムのチラシを入れている。
- ・会員ひとりひとりの背景を丁寧に聞き取り、内容を整理。利用、提供・両方双方の会員が安心して活動できるよう、コーディネートを行った。
- ・横浜子育てサポートシステムの紹介ボードを作成し地域のおまつり等で周知を行った。子育て世代ではない地域の方に事業を知ってもらうきっかけとなった。

3【活動継続の支援】

- ・ひろばでの「ちょこっと預かり(※23)」を月4回開催。預かり場所がスタッフも見守っているひろばであることや、短時間の活動であること等から、活動の機会の少ない方や活動未経験の提供・両方会員への活動の機会にもなっている。
- ・拠点での入会説明会参加時に、入会手続きがその場で完了することで利用会員の登録につながった。
- ・提供会員が事前打合せ票を紛失する事故が発生。ただちに区と対応策を検討し、提供・両方会員全員に個人情報管理用ファイルを配布し、所定の場所で管理するよう注意喚起を行った。
- ・会員向けの交流会を実施。交流している中で利用会員、提供・両方会員が改めて日ごろの感謝の気持ちを共有することができ、会員同士がお互いに活動に対しての意義を確認する時間を提供することができた。

4【他機関との連携と支援】

- ・見守りが必要な親子について区と共有。個別に入会説明を行い、早急に登録の手続きを進めたり、必要に応じたコーディネートをする等の対応を行った。
- ・「ちょこっと子育てレスキュー隊(※24)」の定例会に参加し、地域での預かりについて情報共有し、連携を行っている。
- ・市北部4区(※25)合同で予定者研修会を開催。年度初めに開催することで、市内各区からの参加があり、前年度から研修を待機していた方への提供・両方会員登録への機会となった。また、他区コーディネーターとの交流の機会もなっている。
- ・遠方へのサポート依頼でコーディネーターが難しい場合等、他区支部とも協力し、コーディネーターを成立させるように連携している。

(※23) 前日予約でひろばで子どもを預けることができる横浜子育てサポートシステム会員向けの仕組み。

(※24) 区内で子育て支援事業を行っている団体で構成。子育て中に関わらず、その地域で生活する誰もが暮らしやすくなるために、地域の課題を一団体が抱えるのではなく、団体と個人が協力体制をとって課題の共有や解決に取り組んでいる。横浜市北部地域療育センターでのきょうだい見預かりや出張一時預かり等を行っている。

(※25) 青葉区、港北区、緑区、都筑区

様式1-6 地域子育て支援拠点事業評価シート

評価の理由(区)

- 1 乳幼児健診、母子健康手帳交付時、赤ちゃん会等で事業の紹介を行っている。
- 2 子育て支援者等、子育て支援に従事している方に事業の情報提供を行い、理解を深めてもらった。
- 3 小中学校校長会を通じて、事業周知、チラシの配布を行った。
- 4 配慮の必要な方について、必要に応じてサポート活動の支援や対応方法について定例会等を通じて一緒に検討する等、地区担当保健師や社会福祉職とも連携した。
- 5 拠点に対して個人情報保護研修を実施。必要に応じて個人情報の管理方法について助言を行った。

拠点事業としての成果と課題

(成果)

・今までなかった企業との連携により、「横浜子育てサポートシステム」の事業理解を進められたことは、違う角度からの周知活動につながった。

・「ちょこっと預かり」を行うことで、ひろば利用者がサポート活動を知るきっかけになり、両方会員への興味につながった。

(課題)

・新制度となり利用会員の増加が見込まれるが、利用会員数に対して提供・両方会員数が少なく、コーディネートをする際の課題となっている。今後、提供・両方会員を増やしていく方策を検討することが必要である。

・子育て世代以外の方に、「横浜子育てサポートシステム」の周知がまだ行き届いていないと感じる。事業を知ってもらい、地域全体での協力を得られるように理解をしてもらうことが必要である。

振り返りの視点

ア 区民に対して、子育てサポートシステムについての周知活動を行っているか。

イ 提供会員数拡大に向けた取組がなされているか。

ウ 就労に関する以外の養育者のリフレッシュ等の理由での利用を含め、利用したい人が利用に結びつくための工夫をしているか。

エ 会員が相互の合意のもとに安心安全な活動できるよう、丁寧なコーディネートができているか。

オ 会員の声の把握に努め、必要に応じて活動内容の調整や追加のフォロー等を行っているか。

カ 活動における事故防止のための講習、個人情報取扱いに関する注意喚起など、会員への安全対策をはかっているか。

キ 提供・両方会員が安心・安全な活動を継続して行えるよう研修会等の取組がなされているか。

ク 会員が活動の意義を感じられ、会員間の親睦を深め信頼関係の構築のため、会員間の交流をはかる取組がなされているか。

ケ 援助活動の調整時や会員の声から把握した子育てのニーズを地域子育て支援拠点としての事業に活かしているか(新たな事業の実施や事業の見直しなど)

コ 利用相談の内容に応じて、子育てサポートシステム以外のサービス等の情報提供や関係機関に適切につないでいるか。

サ 専門対応が必要と考えられる相談については、専門機関に適切につないでいるか。

7 利用者支援事業

目指す拠点の姿	(参考) 1期目振り返りの課題	自己評価 (A~D)	
		法人	区
①拠点における利用者支援事業が、区民や関係機関に広く認知されている。	・相談内容が幅広く複雑となったため、多様な情報収集が必要で、提供するスタッフのスキルアップも必要となり、継続して、情報収集やスタッフ研修を実施していく必要がある。	B	B
②相談者に寄り添い主体性を尊重しながら、個別相談に応じ、適切な支援を行っている。		A	A
③子育て家庭を支えるためのネットワークの一員として、包括的な視点を持って子ども・子育て支援に関する関係機関や地域の社会資源との協働の関係づくりを行っている。		A	A

評価の理由(法人)

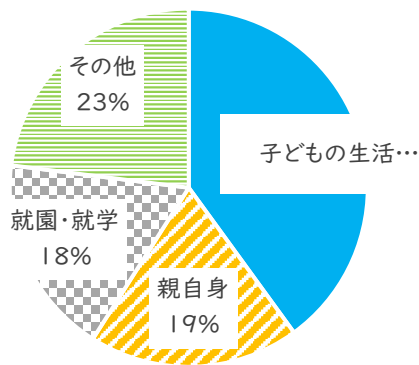
(主なデータ)

<相談件数>

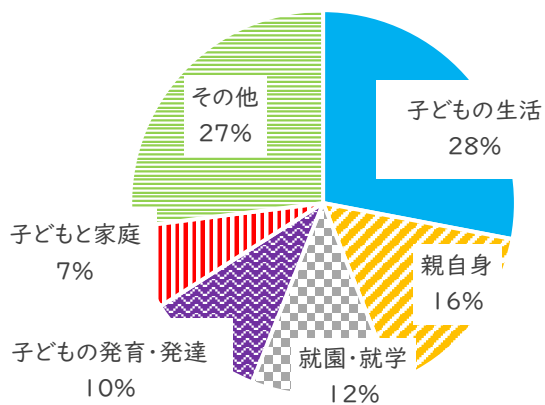
	ポポラ		サテライト
	H30年度	R4年度	R4年度
個別相談	355件	293件	258件
地域連携	174件	167件	174件

<主な相談内容>

H30年度主な相談(ポポラ)

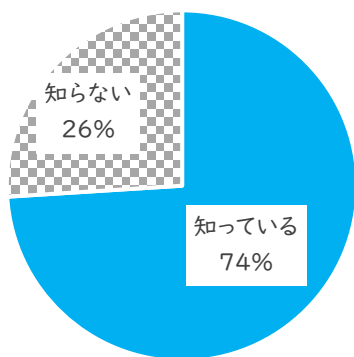


R4年度主な相談(ポポラ・サテライト)

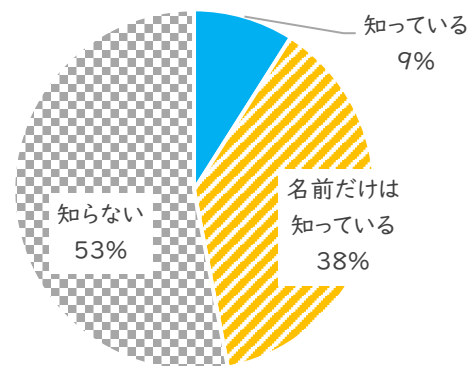


<横浜子育てパートナーの認知度について>

【令和4年度地域子育て支援者アンケート】
子育てパートナーを知っていますか



【令和4年度都筑区子育て拠点ポポラアンケート】
子育てパートナーを知っていますか



様式1-7 地域子育て支援拠点事業評価シート

1【利用者支援事業の周知】

- ・接点を持つ機会が少ない妊娠期の方に会うため、区主催両親教室・妊娠期向け講座、地域ケアプラザ両親教室等に参加して利用者支援事業の周知を行った。そのことがきっかけとなり妊娠期に拠点到足を運ぶ方もみられた。さらに地域の支援関係者にも周知が拡がり、関係性も深まったと感じている。
- ・区と一緒に区内の産院へ訪問し、拠点や利用者支援事業の周知を始めたことで、産院へ定期的に情報を届ける機会が生まれた。
- ・隣接区の産院の希望もあり、隣接区(港北区・緑区)の横浜子育てパートナーと共に産院の両親教室に参加し、拠点が妊娠期から利用できることを周知すると共に利用者支援事業についても説明を行った。また、横浜市全区に拠点が設置されており、身近な場所で横浜子育てパートナーに相談できることを説明した。

2【寄り添った対応】

- ・コロナ禍での妊娠・出産・子育てという現状の中、十分な準備ができないという不安の声を受け、いつでもひろばで赤ちゃんの沐浴等の体験ができるよう取り組んだ。また、区の横浜市個別委託乳幼児健康診査事業の郵送物にメッセージカードの同封を依頼し、身近な相談窓口があることをお知らせした。
- ・地域の居場所(公園遊び、子育てサロン、ほいくえん広場等)に足を運び、養育者が生活している身近な場所で相談ができるよう取り組んだ。
- ・地域のおまつり等に参加し、赤ちゃんのお世話体験ができるよう取り組んだことで、子育て世代以外の人に対しても子育ての理解をすすめる機会をつくることができた。
- ・サテライトは他区民の利用が多いため、他区の横浜子育てパートナーと連携を強化している。双方で見守りを続けたり、連携で得た情報を利用者がいつでも閲覧できるようにファイルを整理し、スタッフも活用している。
- ・相談者に丁寧に寄り添ったことで、子どもが成長した後も拠点に来所が継続している。養育者のみでの来所もあり、養育者自身の体験等をフィードバックしてくれることで、その情報を他の相談に活かしている。
- ・ひろば開所時には話せないことも情報サロンやお茶の間サロンがあることで、帰り際やひろば終了後に悩みや不安を吐き出せる場となっている。
- ・同じような子育ての背景を持つ養育者同士(産後間もない時期のママ、多胎養育者、ダウン症児養育者等)が交流し、情報交換できる場をつくった。当事者同士が同じような悩みや体験を共有することで、子育ての孤立感の軽減につながった。
- ・「傾聴」をテーマに研修を実施。改めて話を聴くことの大切さを理解し、利用者に寄り添った対応ができるよう学びを深めた。
- ・横浜子育てパートナーが参加した様々な研修(「父親支援の勉強会」「ジェンダー平等」等)の内容を拠点スタッフに共有し、スタッフ自身の知識を深める機会を設けた。

3【関係機関との地域連携】

- ・拠点が区内の北部と南部にでき、横浜子育てパートナーも二人になったことで、区内の南部方面、北部方面と分けて担当し、今まで関係性を強化しづらかった南部方面の関係機関との連携が広がった。
- ・イトーヨーカドー赤ちゃん休憩室相談員の保健師との顔合わせの機会を区がつくってくれたことで、相談員と横浜子育てパートナーの連携が始まった。お互いが受けた相談内容によってはお互いを紹介しあえるような関係性ができた。
- ・必要に応じて相談者を関係機関へつなぎ、双方で相談者を見守ることができた。
- ・産院に継続して訪問することで、拠点や区だけではつながりを持ちにくい妊娠期の方への周知を行えた。また産院には、より拠点を理解してもらうことができ、初産婦の方だけでなく経産婦に対しても拠点の利用をすすめてもらえるようになった。
- ・都筑区自立支援協議会子ども部会に参加し、子どものライフステージごとの支援関係者(児童発達支援事業所、放課後等デイサービス、特別支援学校等)と意見交換ができた。就学後に抱える不安等を知り、関係機関が取り組む課題等を学ぶことで、相談者の気持ちにより寄り添えるようになった。
- ・横浜市幼稚園協会都筑支部のイベントに継続して参加したことで、障がい児・医療的ケア児の居場所を実施している関係者と関係性を築けた。相談者に情報提供をするとともに、その関係性を活かし拠点での「ダウン症児親子の日」の開催につながり、拠点利用者の要望に応えることができた。
- ・生活困窮者への食支援の場や情報交換会に参加。新たな支援関係者と関係を築けた。
- ・ネットワークで課題としていた「妊娠期からの切れ目ない支援」について、支援の場が少ないエリアで産前産後の集まりを開催することができた。主任児童委員、親と子のつどいの広場、地区担当保健師等と共に企画運営を担当し、参加者と支援者が身近な地域でつながることができた。

4【母子保健コーディネーターと保育・教育コンシェルジュとの連携】

- ・区主催の両親教室に参加し、母子保健コーディネーターと連携して参加者同士のつなぎや相談の対応を行った。その場で見えた課題等については振り返りを行い、妊娠期からの切れ目ない支援に取り組むことができた。
- ・拠点で保育・教育コンシェルジュの相談日を設けた。子どもを遊ばせながら、保育園等入所や就園について気軽に相談できる場となっている。
- ・定期的に母子保健コーディネーターや保育・教育コンシェルジュと連携して事業を行うことで、変化する社会状況に応じた対応についてタイムリーに情報共有ができています。またその内容について拠点スタッフに共有し、ひろば等での相談に活かすことができています。

様式1-7 地域子育て支援拠点事業評価シート

評価の理由(区)

- 1 広報よこはま都筑区版への掲載のほか、こんにちは赤ちゃん訪問員の定例会に横浜子育てパートナーが参加し、事業説明を行えるよう調整した。
- 2 拠点広報誌を赤ちゃん会や子育て支援者会場、窓口等で配布し、周知を行った。
- 3 定例会や子育てパートナーカンファレンス、必要時に相談内容の報告を受け、支援方針や役割確認等相談・助言を行った。
- 4 横浜子育てパートナーが地域の社会資源と円滑な連携が図れるように、見学等区が関係機関と連絡調整を行った。

拠点事業としての成果と課題

(成果)

- ・コロナ禍、地域に出向く機会が減り、関係機関との連携を深めることが難しい時期もあったが、その中でもイベントの開催や開催方法について情報提供したり、相談を受ける等、地域での支援が途切れることのないよう取り組んだ。
- ・拠点が2か所になったことで横浜子育てパートナーが2人になり、関係機関に足を運ぶことがより増え、連携がさらに強固になった。

(課題)

- ・横浜子育てパートナーの周知がまだ不足している。子育て世代や関係者に利用者支援事業の周知を継続的に行う必要がある。
- ・横浜子育てパートナーが把握している関係機関や地域の社会資源についての情報を整理し、拠点内外に共有することが必要。社会的困難な背景を持つ方等についても、不足する資源の調整や新たな提案を進めていく。

振り返りの視点

- ア 利用者支援事業を幅広く区民や関係機関に周知しているか。
- イ 養育者に対して、気軽に相談しやすい仕組みづくりや工夫をしているか。
- ウ 最新の情報を収集し、活用できるよう工夫しているか。
- エ 相談に対しては、傾聴に努め、ニーズを把握して対応しているか。
- オ 拠点内でおパートナーの役割を理解し、日頃から相談者を拠点内でつなぎ合うことについて、お互いの役割分担を明確にしたうえで、相談対応・利用支援を行っているか。相談者の相談内容に応じて継続対応やつなぐ必要性を判断し、対応しているか。
- カ 専門的な対応を要する相談に対して、相談内容と相談者のニーズを踏まえ、速やかに関係機関への紹介・仲介・支援依頼を行うなど、適切な対応をとっているか。
- キ 拠点内連携、関係機関への紹介・仲介後も必要に応じて役割分担を確認しながら、フォローをしているか。
- ク 相談の対応状況や支援の適切さ、拠点内外での連携状況等について、多角的な視点で振り返りや検討を行っているか。
- ケ 利用者支援事業の周知や個別相談等の取組を通じて、支援につながる新たなネットワークの構築を行っているか。
- コ 拠点のネットワークを活用し、関係機関や地域の社会資源との関係づくり・関係強化を行っているか。
- サ 把握した課題を関係機関等と共有し、拠点事業の充実、必要な支援の調整や見直し、不足する資源の調整、提案や新たな創出につなげているか。